

日本労働年鑑 第28集 1956年版
The Labour Year Book of Japan 1956

第一部 労働者状態

第五編 農家の状態と農民の生活

第二章 農民の栄養状態

第一節 栄養摂取状況

農民の栄養状況に関する調査は、農林省の「農家経済調査」の一環として実施され、その結果は「農林水産統計月報」(統計調査部刊)に毎月発表され、また別に年次別集計結果が公表されている。つぎに一九五三年四月から五四年三月までの一カ年の栄養状態調査結果の概要を、「農林省農民栄養調査報告」(農林水産統計資料第六五七号一九五五年五月刊)にもとずき記述しよう。

なお本調査の対象農家は、農家経済調査のばあいと全く同一で、全国各区より階層別に任意抽出された五七九三戸である。調査方法は次の通りである。

(一)調査農家の現金取引と自家生産物の家計仕向け的一切を日計簿に計上し、地方別に中間集計したのち中央で全国集計し、その結果を全国および農区別経営耕地広狭別にそれぞれ調査戸数で除して一戸当り数量、価額が算出された。右の集計結果のうち、飲食物の数量と価額に関する部分の基礎資料を更に分析計算し、これを基礎にして食品別の栄養成分表を用い摂取栄養量が計算された。

(二)調査品目は八五種の飲食物で、摂取栄養素別成分量の計算に用いた「食品群別栄養素別成分表」は総理府資源調査会食糧部会が一九五四年三月決定した「改訂食品標準成分表」を基礎として農林省経済調査課において作成したものである。また調査結果たる農区別階層別の飲食物の消費数量は、それぞれ農家一戸当り平均消費数量として表示され、その数量を基礎として栄養摂取量が計算された。右の数字からさらに一人当り平均および一日当り平均摂取栄養量が計算されたのである。

食品群別農区別にみた摂取栄養量

調査農家の全国平均一戸当り常住世帯員数は六・四一人(男三・一四人、女三・二七人)で、年齢別にみると、二〇才未満が二・八一人、六〇才以上〇・六七人である。

第223表は食品群別にみた全国平均一人当り摂取栄養量を示すものである。本表によって農民の栄養摂取状況をみると、熱量、蛋白質、脂質、燐、鉄、ビタミンB1、B2およびナイアミンは主として穀類により、ビタミンAおよびCは野菜類よりとっており、またカルシウムは主として野菜類、穀類および調味料等より、食塩はもっぱら調味料に依存している。すなわち穀類からの栄養摂取量は、熱量一八八〇・三カロリーで総熱量の八〇%をしめ、また蛋白質も総摂取量の六一%、脂質は四一%をしめ、その他燐、鉄、ビタミンB1、B2等も総摂取量の四〇―七〇%を穀類からとっており、いわゆる主穀偏重の栄養摂取状態を明白に物語っている。

諸類の栄養摂取量のうちで比較的多いものは、熱量の九九・一カロリー、ビタミンB1の〇・一ニミリ

グラム、Cの二四・一〇ミリグラム等で、その他は極く少量をしめているにすぎない。豆類による栄養摂取は非常に少い。また嗜好品類の摂取栄養量が総摂取量のなかでしめている割合が極めて少いのは、農民の低い生活水準を反映するものである。

農民の栄養摂取量を農区別にみると、熱量では東北がもっとも多く、北海道、瀬戸内、北九州、北関東、山陰、北陸、近畿、南関東、東海の順序となっており、最少は南海である。蛋白質もこれとほぼ同様の順序であるが、動物性蛋白質は北海道が最も多く、南関東が最も少くなっている。また北海道は脂質においても最高で、東海は最低である。このように北海道の農民の栄養摂取状態は全国で首位をしめているが、動物性蛋白質は一六・〇六グラムで全国平均の約二倍、主として肉卵類からの摂取である。東北は熱量が二五一四カロリー、蛋白質七四・二グラムで他県にくらべて非常に多く、その他の穀類においても北海道について第二位である。北陸は穀類消費が多いにもかかわらず、他の食品消費が少いため栄養摂取量も比較的少い。北関東はビタミン摂取量において他の農区にすぐれ、南関東は熱量、蛋白質、脂質いずれも全国平均以下である。東海は南関東よりさらに少く、近畿は動物性蛋白質からの摂取が比較的多いが、ビタミンは極めて少く、全国中最下位をしめている。瀬戸内では全国平均にやや近く、北九州は全国平均よりやや劣るが、南海はビタミンCをのぞき全ての種類において全国平均をいちじるしく下廻り、熱量は二一九二・二カロリーで全国中最下位である。(第224表参照)

月別にみた栄養摂取量

農民の栄養摂取状態を月別にみると、熱量、蛋白質、脂質はいずれも一二月が最も多く、ついで六月、一一月の順となっている(第225表参照)。また熱量では五月、蛋白質では七月、脂質では三月がもっとも摂取量の少い月となっている。無機質では、一二月、一一月、六月が多いが、五月、七月、三月は比較的少い。ビタミン類、Aは四、八、九、三の各月が多く、BおよびCは一、二、一、一、六、一〇月が多くなっている。

五月は春耕期で多量の労働支出がある月であるにもかかわらず、熱量はじめ各種類ともきわめて少量で、これと対極に一二月は農閑期であるのに、ビタミンA、Cをのぞき何れの種類の栄養摂取量も年間を通じてもっとも多く、動物性食品からの摂取も多い。六月もこれにつぎ熱量の摂取が多いが、本格的な農繁期に入りエネルギーの消耗が激しくなるのでこれに対応するためであろう。しかし本表を通じてみられる様に、農民はエネルギーを消耗するからそれに対応して栄養を摂取している、とは言えない。むしろ農閑期の一二月や八月、一月に比較的多くの栄養をとり、四月、九月等の農繁期にはむしろ平均以下の栄養しかとっていないことが示されている。

経営耕地の広狭別にみた摂取栄養量

右にみたように、農民の栄養状態は、農区別にも、また月別にも、かなりの差異を示しているが、これを農家の経営階層別にみたらどうか。第226表は、農業構造上よりみて、対照的な近畿と北陸の両農区における耕地広狭別にみた摂取栄養量を示したものである。北陸では、耕地面積が広くなるにしたがい栄養摂取量は多くなっており、二町以上の最上の階層では熱量は二五〇三・二カロリーで、五反未満の最低階層二一八・一カロリーに比べ、三八五・一カロリーも多量に摂取しており、上下階層間の栄養摂取量にはきわめて大きな開きのあることを明示している。蛋白質についても同様である。ただ脂質については、一・五町一・二町以上の階層が最も多く、五反未満層との差は一五・七グラムとなっている。カルシウム、ビタミンB1は脂質と同一の傾向を示し、二町以上層ではかえって幾分少い。

農家の経営が大きくなるにしたがい栄養摂取量が多くなるという傾向は、近畿においても看取される。熱量では一・五町ー二町層がもっとも多いが、これは二町以上層になると穀類の消費量がすくないからである。蛋白質、脂質などは、二町以上層の摂取量がもっとも多い。最下層の五反未満層との差は、蛋白質一・三八グラム(内動物蛋白五・一五グラム)に及んでいる。

日本労働年鑑 第28集 1956年版

発行 1955年11月20日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2002年3月5日公開開始

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1956年版(第28集)【目次】 次のページ→ ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
